

突然ですが、1966年に出版されて、200万部を超えるベストセラーとなった書籍「天国に一番近い島」(森村桂：著)をご存じの方はおいででしょうか?その18年後に映画化され、今でも<DVD>が発売されていますから、若い方でもご存じの方はおいでだと思います。その物語は横においておきますが、この「天国に近い島」は『ニュー・カレドニア』です。単純ものの私は、この本を読んで感動し、一度は行ってみたいと思いましたが、ある時<YAHOO知恵袋>を読んだところ、そのコーナーへの投稿者からの「自分は長らくフィジーに住んでいたが、本に影響されて、ニューカレドニアについてみた。ところが、あくまでも透明に近いブルー(そのようなタイトルの小説がありました)の澄んだ海や素晴らしい自然を知っている身としては、失望の方が多かった」と言うコメントが有り、「それじゃあそちらにしよう」ということで、<F I J I>(フィジー)に、ダイビング仲間と出掛けてきました。

そのフィジー共和国は、日本から南南西に約8,000km、南太平洋に浮かぶ、島の数約300からなるオセアニアの国家です。面積は四国ほどですが、人口が400万人弱の四国に対して、90万人弱の国です。

以前は、フィジーまでは日本からの直行便が有り、8時間半ほどで行けたそうですが、「4年間で<1900万ドル>(約22億8000万円程度)の大赤字が有って撤退した」ということで、我々は、かの「大韓航空機」を利用。韓国・仁川<Incheon>乗継で、フィジーのナンディ<Nadi>空港に向かうことになりました。余談になりますが<Nadi>が、「なんで」ナンディなのかを尋ねたところ「<a>の次に子音が来ると「アン」と発音するそうで、<Labasa>「ランバサ」もあるよと言われて、納得しました。

ところで、我が日本国は「昨年来日観光客が1,300万人を超えた」と大騒ぎをしていますが、フィジーでは632,000人(2010年)とのこと。そのうちの半数近くがオーストラリア人、続いて98,000人のニュージーランド人で、日本人観光客は僅か15,000人弱だったそうです。

我々が選んだ離島は「マナ・アイランド」。ナンディの港から船で1時間半(飛行機だとたった10分!)。フィジーでは一番人気で、「もう一度訪ねたくなる島(フィジー・マジック)」だそうです。マナ島には、他の離島にはない「長い木製の栈橋」があり、渡りきったところでフィジー人が楽器と歌で歓迎してくれました。

「年末の忙しい時に何故(ホノルルに)ゆくねん?」「よっぽど暇でないか…」「マラソンなんてよくやるね〜」そんな風に思っていた時期もありましたが、河野栄様との出会いを通じて2009年12月ハワイ・ホノルルの地で 人生で初めて42.195kmを4時間52分27秒でフィニッシュラインを両手を挙げて祝福の拍手喝采のなか通過していました。還暦を期に60歳から始めた憧れのホノルルマラソン20回走への道のりのお話です。

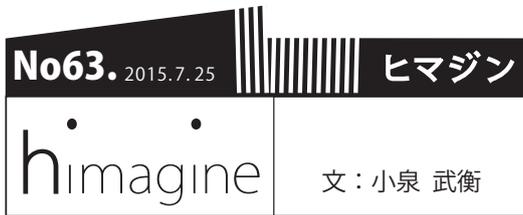
2006年の暮れに行政が主催する異業種交流会イベントが130名を超える会場で行われていてプレゼンターの私の隣に座られた方が株式会社コノエの会長の河野栄様でした。「明日、ホノルルに行きまねん!」「へ〜どうですか?」「ホノルルマラソンの18回目に出まねん」「凄いですね。」「じゃあ〜帰国されたらご挨拶に伺いますわ」と言ってその場は別れますが、私がマラソンを始めるきっかけとなった河野栄様との初めての出会いとご縁のはじまりでした。

帰国後の河野様の会社にお伺いさせて頂いたお礼、社員の方が明るい笑顔で「ホノルルマラソン!今回会長は79歳の部で見事1位で完走しました」「4時間53分38秒でした。ありがとうございます。」河野様の明るい笑みでのご挨拶にも感動しました。この時に贈呈頂いたご著書は…「昭和27年、すべての面でゼロから出発した事業が年商60億円(平成4年)の会社になりました。得意先・仕入先・関係先の皆様のご支援の賜物だと深く感謝いたしております。(中略)「楽しくなければ仕事でない」、「豊かでなければ人生じゃない」といいますが、つらく・苦しく・いやな仕事を自分の趣味になるまで愛してこそ、豊かな人生が築かれるのだと思っております。かけがえのない人生であることを自覚して、一日一日を精一杯、今日を最高の一日にして明日に向かって進んでいくことが私たちの生きがいです。」「人生はお祭りのように」(創業50周年記念)河野栄著(平成14年7月1日)より

このような書き出しではじまる同氏の著書は、創業経営者としての決意と社員の皆さんの指針となる物語であり、さらに関係先の皆さんへの熱烈な感謝の気持ちが記されています。

とくに後半部分がホノルルマラソン初挑戦の苦労話と見事に完走された喜びとすべての人々への感謝の言葉に満ち溢れていて感動が伝わってきました。この時に河野栄様を師匠として近い将来ホノルルマラソンを一緒に走れることを人生の目標に加えたいと決意を新たにした記念日となりました。

それから3年後の2009年2月、河野様から「ホノルルマラソン20回走を祝う会」



「フィジー・マジック」?

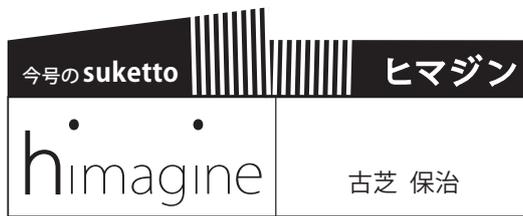
島は東西に細長く、スタッフによると「島一周は徒歩で1時間半ほど」だそうです。東半分は「神が宿る神聖な聖域」として、観光客は立ち入りが禁止になっています。島の周囲の海は「知恵袋通り」で、言葉に表せないような透き通ったブルー。そして文字通りの白砂。空は、見飽きないスカイブルー。夜は満天の星空で、かのサザンクロスを始めとして星たちのオンパレード。時間の経つのを忘れるほどです。そしてヤシの木に囲まれた宿舎と言えば、アイランド・ブレと呼ばれる『草ぶき屋根の入母屋造』(上部は「切妻造」下部は「寄棟造」)など含めて152室。

この島の観光客の多くは「ただただ、ひたすら長期間のんびり過ごす派」のように、小さな子供連れの家族が目立ちました。次は私よりも年配のご夫婦。珍しかったのは一見マフィア風の子供連れの3組のファミリー。「どちらから?」と尋ねたらやはり「イタリー」。10歳くらいの女の子にハグされて、仲間から「後が怖いよ」と脅かされました。日本人は若いペア二組としか会いませんでした。新小岩の焼肉屋だそうで、連続7年来ているということです。「そのうちお店に行きますから」と約束してきました。(注：行ってきました。極めて美味でした!)

そのような中で、27年間この島に暮らしているという日本人ダイビング・ガイドから面白い話を聞きました。25年前、たまたま別々にこの島に来た日本人男性各1名がなぜか意気投合して、以後25年間毎年同時期に来ているそうです。日本に居る時には一切ノー・コンタクト。勿論フィジー行ききの打ち合わせも無し。この島で会ってこの島で別れて…25年だそうです。どちらかの男性の奥さんから、はじめの頃は「愛人がいるのではないか」と疑われたが、そのうちに嫌疑は晴れたそうです。それもこれも「フィジー・マジック」なのだと思います。

肝心の「ダイビング」ですが、それを書くに『<himagine へり>をもう一回』になりますので、自重しますが、ガイドが用意した餌目当てに集まってきた「オグロメジロザメ」「ツマグロ」「ネムリブカ」といった数十頭のサメたちが間近に押し寄せてきたシーンは圧巻。何故か恐怖心はゼロ。サメ保護基金30フィジドル(約2,000円)払った甲斐が有りました。

かくして、『海に沈む夕日を最後の瞬間まで眺められたら、その地にはもう来られない』という「我がジグクス」は、すんでのところで雲が邪魔をしてくれ、「我がフィジー・マジック」は生き延びました。



還暦から初めたマラソン

の一通の招待状が届きました。完走お祝いの花束を携え600名が集うパーティーに参加。司会者から「プレゼンのある方は、お一人づつ壇上に上がられて一言お祝いのお言葉を頂戴したいと思います」のアナウンスがあり舞台上に上がりました。「20回走おめでとうでございます。私も還暦の今年からホノルルマラソンに初チャレンジします!20回走の河野様を目標にします!」と皆様の前で決意宣言後に引けない状況を作りだしました。

さあ、それからその決意を本物にするための行動がはじまってゆきました。誕生月の3月3日

のひな祭りを吉祥に「年末にホノルルマラソンにて42.195完走にチャレンジする。ついでにシューズとウェアを買いたい!」と家内に打ち明けると「どうせ3日坊主でしょ」「シューズは買う必要なし!あるもので我慢!ウェアは、足の長さが一緒だから私のを貸すわ」と一笑でした。とりあえず着の身着のままのスタイルで増田明美著「ジョギング&ウォーキング入門」のビデオの教え通り毎日早朝の60分間ウォーキングがはじまってゆきました。2週間後、走ってみると息が上がりあえなく1分で足が止まります。最初は100mも走れませんでした。3月31日にはなんとか5分間連続で走れるようになってゆきました。帰宅するやいなや「そんな格好(女性用)で近所を走らんといて!シューズもウェアも買ったら!」「やった!」マラソン3日坊主の汚名を晴らすとともに家内と連れ立ってジョップに行ったことが思い出されます。

同年5月末には青山高原105kmマラソン完走 8月には神鍋高原ハーフマラソン完走、11月には淀川市民ハーフマラソンで足の痙攣に襲われながらも2時間8分で完走、大会2週間前のお伊勢さんハーフマラソンを1時間57分9秒で完走することができました。なんと9ヶ月間の間に1500kmを走り込み、いよいよホノルルの地に乗り込む日がやってきたのです。

ホノルルマラソンの魅力は、ハワイの美しい風景と大会を支える地元の方々の笑顔と献身的なボランティアの姿にあります。さらに年末の忙しい時期にホノルルの地に駆けつけてくる人生で熱意をもった人々の生き方に直に触れる機会があり、ともに苦難を乗り越えた喜びを共有できる素晴らしい皆さんとの素敵な出会いとご縁が生まれることにあります。「ホノルルマラソンを20回走する」夢に向かっていきますと走る楽しさとともに健康な身体づくりと困難に立ち向かう忍耐力が大自然のなかで培われてゆくことを感じる今日この頃です。(詳しくは、「古芝保治」でブログ検索ください)